



## ネルヴァルとピエール・ラクール

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要
号	2
ページ	91-98
発行年	2007-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000236/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000236/</a>

# ネルヴァルとピエール・ラクール

間 瀬 玲 子

Nerval et Pierre Lacour

Reiko MASE

## I. 序

19世紀のフランス人作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は、「アルチスト」誌 *Artiste* 1844年9月15日号に「ディオラマ、オデオン座」《Diorama, Odéon》という評論を掲載した。19世紀前半の短い期間にフランスで流行したディオラマについての評論であるが、この評論の中でネルヴァルは多くの著作について言及している。<sup>1)</sup> この中のひとつがピエール・ラクール Pierre Lacour の著書のひとつである『エロイムあるいはモーゼの神々』 *Eloim, ou les Dieux de Moïse* である。この著書はフランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France に所蔵されている。

このたびピエール・ラクールのこの著作のコピーをフランス国立図書館に依頼し、入手した。本論文ではラクールの著作がネルヴァルにどのような影響を与えたかを検証することを目的とする。

## II. ピエール・ラクールについて

まずピエール・ラクールとはどのような人であったのかを『19世紀ラールス百科事典』 *Grand Dictionnaire universelle du XIX<sup>e</sup> siècle* を使って調べると、次のように記載されている。

Lacour (Pierre), peintre et archéologue français, fils du précédent, né à Bordeaux en 1778. Il s'adonna à la peinture, à la gravure, succéda à son père comme professeur et directeur de l'Ecole de peinture de Bordeaux, et fit une étude toute particulière des monuments antiques, de l'hébreu et des langues anciennes. C'était un homme fort instruit, mais dont les idées étaient souvent paradoxales. Lacour a publié plusieurs ouvrages archéologiques et pittoresques ...<sup>2)</sup>

ラクール (ピエール)、フランスの画家で考古学者、前者 (前の項目に記載されたピエール・ラクールの父を指している) の息子。彼は絵画、版画に没頭し、ボルドー絵画学校の教授と校長として父の後を継いだ。彼は古代建築物、ヘブライ語、古代言語の特別な研究をした。彼はとても学識の深い人だが、その考えはしばしば矛盾している。ラクールはいくつかの考古学と絵画の

著作を出版した。

ピエール・ラクルの父もまたピエール・ラクルという名前であった。父も息子と同様ポルドーで生まれ、ポルドーで亡くなった。父もまた絵画だけにとどまらず、文学的な作品を執筆し、古代の石棺についての論文を執筆した。父と息子の違いは、息子が画家としての業績のみならず、奇書と言われる古代言語に関する著作を残したことであると言える。

現代の百科事典である『ラルース大百科事典』 *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse* では父ピエール・ラクルの項目はあるが、息子ピエール・ラクルの項目はなく、かろうじて父の項目の中で「彼の息子ピエール [ポルドー 1778 同地 1859] は画家で考古学者であった」と記載されているだけである。<sup>3)</sup>

19世紀の百科事典では息子のほうが父よりも沢山の事項が記述されているのに対して、現代の百科事典では父の項目の中についてのように息子のことが書かれているのは、評価が逆転したことを表しているとも言える。

### Ⅲ. ネルヴァルは「ディオラマ、オデオン座」でどのような記述をしているのか？

本論文の序で書いたように、ネルヴァルは「ディオラマ、オデオン座」という題名の評論を発表した。この評論の中でピエール・ラクルに関係する箇所だけを引用してみよう。

Il y a dans l'hébreu BNI ÉLOÏM ce qui veut dire *bni* les fils, *éloïm* des Dieux, selon Philon, les gnostiques et les kabbalistes, et aussi selon Court de Gébelin, Fabre d' Olivet, et Lacour, l'auteur du livre curieux intitulé *Éloïm ou les Dieux de Moïse*.<sup>4)</sup>

ヘブライ語にブニ・エロヒムという言葉があり、ブニは息子たち、エロヒムは神々を意味している。それはフィロン、グノーシス派の人々、カバラ学者の説であり、クール・ド・ジェブラン、ファープル・ドリベ、そして『エロヒムあるいはモーゼの神々』と題された奇書の著者であるラクルの説である。<sup>5)</sup>

以上のようにネルヴァルは「ブニ・エロヒム」の解釈についてラクルたちの説を紹介している。またエロヒムやモーゼに関する複数の説を紹介している。エロヒムが名だたる精霊にも割り当てられたこと、神が複数になっているのは多数の人格を有すること、モーゼは創造主を複数でしか呼ばないから多神教だという説などである。そして教会はこれらの異端の説を認めることはなく、わざと複数形を単数形にして翻訳したと彼は書いている。

#### IV. ピエール・ラクルの著作における「ブニ・エロヒム」

次にネルヴァルが「ディオラマ、オデオン座」という評論で記述したことは、ラクルの『エロヒムまたはモーゼの神々』の中で具体的にどのように記載されているのかを調べてみよう。

ラクルは彼の著書の中で「ブニ・エロヒム」に関して数箇所言及しているが、最も明確に書いているのは次の箇所である。

Si le mot ALÉIM dans la pensée de Moïse ne désignait, comme on le suppose, qu'un seul Dieu, comment traduirait-on le fameux BNI E-ALÉIM de l'épigraphie ci-dessus? Dira-t-on *les fils des grands*, comme plusieurs savants le proposent?<sup>6)</sup>

人々が推測しているように、モーゼの考えの中でエロヒムという言葉が唯一の神しか表さないとするなら、上記のエピグラフにある例の「ブニ・エ・アレイム」をどのように訳すのであろうか？何人かの学者が提案しているように偉人の息子を言うのであろうか？

この引用のエピグラフに書かれているのは聖書の一節である。ラクルの記述の一部を引用してみよう。

[...] Et LES FILS DES DIEUX (BNI EALEIM) considérèrent l'individualité des filles de l'homme. *Genèse*, 6. [...]

Il arriva que LES FILS DES DIEUX (BNI EALEIM) vinrent pour se tenir en rang à leur poste autour de JÉOVÉ. *Job, chap. I et 2.*<sup>7)</sup>

ここで特筆すべきことは LES FILS DES DIEUX (BNI EALEIM) というように括弧をしてブニエアレイムを強調していることである。ラクルの聖書の引用を日本語に訳すと次のようになる。

そして神々の息子たち（ブニ エアレイム）は人間の娘たちの個性を眺めた（略）。  
（創世記，6章）

神々の息子たちが神の周りにその地位に従って並びに来るということがあった。  
（ヨブ記，1章と2章）

現代の聖書の仏訳で該当箇所を探すと次のように書かれている。

Les fils des dieux voient la beauté des filles de l'adam ...

(Genèse, 6)

Un jour, les fils de Dieu prennent place devant Yhwh.  
(Job, 1 et 2)<sup>8)</sup>

聖書の日本語訳では次のようになっている。

神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て (...). (創世記, 第6章)  
ある日, 神の子たちが来て, 主の前にたった。(ヨブ記, 1章と2章)<sup>9)</sup>

上記の現代の聖書の仏訳では『創世記』は dieux (小文字で始まる神々), 『ヨブ記』では Dieu (大文字で始まる神) である。小文字で始まる神の複数形はラクールのような解釈を生む余地を与えている。ネルヴァルは聖書の様々な解釈に大きな関心を寄せていたので, ラクールの著作が彼の関心を引いたことは理解できる。

またラクールは聖書に使われている主要な単語の仏訳も書いている。

fili BNI les fils, les disciples, les initiés à la science, à la doctrine,  
Dei ÉALÉIM des forces, des Dieux, des puissances qui jugent<sup>10)</sup>

fili ブニ 息子たち, 弟子たち, 科学や教義の秘伝を伝授された人々  
Dei エアレイム 力, 神々, 判断する力

これは先に引用した「ブニ エアレイム」の解釈よりも, ラクールの考え方が詳しくわかる箇所である。

それではネルヴァルがラクールから「エノク」に関しても影響を受けたのであろうか? まずネルヴァルの「ディオラマ, オデオン座」の評論の中で「エノク」に関する文章を引用してみよう。

La ville d'Énoch ou de Hénoch, ce Paris antédiluvien, cette cité des abominations primitives dont la Bible ne dit qu'un mot, avait été bâtie par Caïn, qui lui donna le nom de son fils.<sup>11)</sup>

エノク (Énoch) あるいはエノク (Hénoch) の町は大洪水前のパリとも言える, 聖書が一言でしか触れていないこの嫌悪すべき原始の町はカインによって建設された。カインは町に自分の息子の名前をつけた。

エノクに関してラクールは『エロヒムあるいはモーゼの神々』2巻の複数の箇所で言及している。

それによるとエノクの意味は次のようになる。

Hénoch [...] l' initiateur, l' initiation, l' enseignement religieux, la sainte doctrine professée et reçue <sup>12)</sup>

エノク 知識を手ほどきする人、イニシエーション、宗教的な教育、教えられ、そして容認された教義

ラクールが彼の著書の中で「エノク」について書いている他の箇所も参照したが、大同小異であった。

ネルヴァルは「ブニ・エロヒム」に関してはラクールの著書から大きな影響を受けたと考えられるが、「エノク」に関しては上記の引用から判断すると、直接の関係は認められないと考えられる。

## V. クール・ド・ジェブラン, ファーブル・ドリヴェ, ピエール・ラクールの位置づけ

本論文の で述べたようにネルヴァルは評論「ディオラマ, オデオン座」で3人の人物, クール・ド・ジェブラン (1728 1784), ファーブル・ドリベ (1767 1825), ピエール・ラクール (1778 1859) について言及した。この3人をどのように位置づけたらよいのであろうか？

まずピエール・ラクール自身がファーブル・ドリベについて書いている文章を引用してみよう。

Fabre d' Olivet, dont le livre Hébreu avait pour objet la restitution de cette langue, a fait voir évidemment qu' elle doit être égyptienne et avoir été usitée parmi les prêtres égyptiens.<sup>13)</sup>

ファーブル・ドリヴェは、そのヘブライ語の本がこの言語の復元を目的としているのだが、この言語がエジプトのものであり、エジプトの司祭によって用いられていることを明白に見せた。

ラクールはファーブル・ドリヴェについてこの著作の他の箇所でも言及している。ラクールがファーブル・ドリベを評価していたことは事実だと考えられる。

さてネルヴァル研究の碩学と言われたジャン・リッシェ Jean Richerはこの二人を次のように評価している。

[...] le rare ouvrage de P. Lacour : *Aeloim, les Dieux de Moïse* (2 volumes, Bordeaux 1839) fait de cet auteur un digne émule du Fabre d' Olivet de *La Langue hébraïque restituée* (1815 1816). P. Lacour donne un alphabet zodiacal, des remarques sur l' initiation et une interprétation mot à mot du sens ésotérique de La Genèse à la lumière de l' enseignement égyptien.<sup>14)</sup>

(略) P. ラクールラクールの奇書『エロヒム モーゼの神々』(2巻, ボルドー, 1839)はこの著者を『復元ヘブライ語論』(1815 - 1816)のファール・ドリヴェファール・ドリヴェの尊敬に値する好敵手にしている。P. ラクールは黄道十二宮の表, イニシエーション(秘儀伝授)についての考察を示したり, エジプトの教えを手がかりとして創世記の秘教的な意味を一語一語ずつ解釈している。

またファール・ドリベの数少ない研究書のひとつを発表したレオン・セリエ Léon Cellier は上記の3人を次のように位置づけている。

Voici Lacour, qui, en s'inspirant lui aussi de Court de Gébelin et de Fabre d'Olivet, a tenté dans *Ælohim ou les Dieux de Moïse*, de donner la véritable interprétation de la Genèse.<sup>15)</sup>

ラクールもまたクール・ド・ジェブランクール・ド・ジェブランとファール・ドリベファール・ドリベに着想を得て, 『エロヒムまたはモーゼの神々』の中で『創世記』の真の解釈をしようとした。

ジャン・リシェジャン・リシェとレオン・セリエレオン・セリエが下した評価をまとめると, ピエール・ラクールピエール・ラクールはクール・ド・ジェブランクール・ド・ジェブランとファール・ドリベファール・ドリベの書物を読み, そこから着想を得て『エロヒムまたはモーゼの神々』を執筆したのだと考えられる。ピエール・ラクールピエール・ラクールはファール・ドリベファール・ドリベの著作に対して評価をしているが, 二人の間の交友関係に関しては全く言及していない。

## VI. 結 論

以上述べてきたようにネルヴァルネルヴァルが評論「ディオラマ, オデオン座」の中で言及したピエール・ラクールピエール・ラクールの『エロヒムまたはモーゼの神々』をブニとエロヒムの観点から分析した。ラクールラクールはブニを息子, エロヒムを神々だと解釈している。この点に関してネルヴァルネルヴァルはラクールラクールの著書から直接の影響を受けている。しかしネルヴァルネルヴァルが強い関心を抱いた町であるエノクエノクに関してはラクールラクールからの影響は受けてはいないと考えられる。聖書の中の一ヶ所でしか言及されていない大洪水前の都市であるエノクの町に対してラクールラクールはそれほどの関心はなかったと言える。

ラクールラクールはボルドーボルドーで生まれ, その地で亡くなっている。『エロヒムまたはモーゼの神々』はボルドーボルドーの出版社から出された本である。古書として全くと言ってよいほど流通していない。序で書いたようにパリにあるフランス国立図書館フランス国立図書館に所蔵されており, 依頼することによりコピーを入手することができた。今のところ電子テキスト化もされていない。ネルヴァルネルヴァルの研究書の中で言及されることはあっても, ラクールラクールその人の研究書は存在しない。つまり今では全くと言ってよいほど忘れられた存在であると言っても間違いでないと思われる。

ネルヴァルネルヴァルがラクールラクールとともに言及したファール・ドリヴェファール・ドリヴェは多くの著作が出版されている。ネルヴァルネルヴァルが影響を受けた『復元ヘブライ語』も出版されている。またフランス国立図書館フランス国立図書館の電子

テキストプロジェクト Gallica によって『復元ヘブライ語』の電子テキストを無料で入手できる。本論文で引用したようにファーブル・ドリベを対象にした研究書も出版されている。クール・ド・ジェブランの『原始世界』*Le monde prrimitf* は本は出版されていないが、Gallica によって電子テキストが提供されている。

ラクールは他の二人に比べると決定的に不利な状況に置かれている。しかしネルヴァルの評論『ディオラマ、オデオン座』においてネルヴァルは上記の3人の作家に対して同等の評価を与えているのである。今回それがコピーであるにしてもラクールの著作の全貌を見ることができ、ラクールとネルヴァルの記述を比較し、直接的な影響関係を指摘できたことは有意義なことであると考えられる。

## 注

1) ネルヴァルが視覚芸術のひとつであるディオラマに関する評論の中で言及した著述家に関して、以下の論文で考察した。

間瀬玲子「ネルヴァルとファーブル・ドリヴェ — モーゼの宇宙進化論 —」『筑紫女学園大学紀要』第17号, 2005年1月, pp. 51-59.

間瀬玲子「クール・ド・ジェブランの『原始世界』とネルヴァルの作品の関連性」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号, 2006年1月, pp. 129-137.

2) *Grand Dictionnaire universelle du XIX<sup>e</sup> siècle*, tome 14, Nîmes, 1991, p. 38.

3) *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse*, tome 6, Paris, Larousse, 1984, p. 6073. (全巻を通じたページ数)

4) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven d' Hulst, Jean Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d' Antonia Fonyi, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, 1989, p. 840. 以下ネルヴァルのこの巻をPL.Iと略す。

5) 翻訳をする際、『ネルヴァル全集 幻視と綺想』筑摩書房, 1999年に収録された阪口勝弘訳「ディオラマ、オデオン座」の翻訳及び注を参考にした。旧版『ネルヴァル全集』筑摩書房, 1976年に収録された稲生永訳「ディオラマ」の翻訳及び注も参考にした。

6) Pierre Lacour (le fils), *Eloim, ou les Dieux de Moïse*, tome I<sup>er</sup>, Bordeaux, J.Teycheney, 1839, 2 tomes en 1 vols, p.201.

7) Pierre Lacour (le fils), *Eloim, ou les Dieux de Moïse*, tome I<sup>er</sup>, p. 201.

8) *la bible*, Paris, Bayard, 2001, p.46 (Genèse), p.1450 et p.1451( Job). 参考として他の仏訳を見ると《Les enfants de Dieu, voyant que les filles des hommes étaient belles...》(Genèse, chapitre VI) 《Or les enfants de Dieu s' étant un jour présentés devant le Seigneur...》(Job, Chapitre I et )(*La Bible*, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, Paris, Robert Laffont, coll. 《Bouquins》1990. この仏訳では『創世記』は大文字で始まる単数形の神, 『ヨブ記』でも大文字で始まる単数形の神と訳されている。このように聖書の訳によって神の表記が違ふことは明記すべきである。



- 9) 『旧訳聖書』日本聖書協会, 1974年, p. 6 (創世記) 及び p.697-698 (ヨブ記)。
- 10) Pierre Lacour (le fils), *Eloïm, ou les Dieux de Moïse*, tome I<sup>er</sup>, p. 258.
- 11) PL.I, p.840
- 12) Pierre Lacour (le fils), *Eloïm, ou les Dieux de Moïse*, tome II, p. 138.
- 13) Pierre Lacour (le fils), *Eloïm, ou les Dieux de Moïse*, tome I<sup>er</sup>, p. 177.
- 14) Jean Richer, *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques*, Paris, Le Griffon d'or, 1947, p. 87.
- 15) Léon Cellier, *Fabre d'Olivet, contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme*, Genève, Slatkine Reprints, 1998, p. 359.

**付記：**本研究は平成18年度独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C) (課題番号 16520196 「ネルヴァルにおけるディオラマの思想的背景」研究代表者 間瀬玲子) により遂行された研究の一部を公表したものである。